

あるむぜお72

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 72

2005年6月20日



昭和48年(1973)撮影(写真No.1106-35a)

目次

- 1-2 宮本常一の見た府中 その1
宮本常一と府中の写真
- 3 展示会案内 特別展 遺跡の世界 2005
上円下方墳って何だろう&最新発掘速報
- 4 シリーズ体験学習の巻 自然観察会心理
- 5 最近の発掘調査番外編
府中市初の国指定史跡「武蔵国分寺跡参道口」
- 6-7 ノート 移動する境界、野から川へ
- 8 古の扉が博物館で開かれる!!
- 9 昨年度報告・新刊情報
- 10 たまRIVER WARS ⑨もう一匹の巨大ザル

ケヤキ並木を横切る京王線

…街道筋の人びとも鉄道敷設を希望する声が強くなっていた。

大正五年にやっとその念願がかなったのだが、そのときも、電車がケヤキ並木を横切って走るのが問題になり、駅をできるだけ市街地から遠く北の方へ造ることにした。今の府中駅の位置がそれであるが、開通当時は電車は桑畑の中を走っていた…(中略)…しかし府中に駅ができたということで、東京新宿へ電車であつなぐることになり、府中は宿場町から商業都市への成長をはじめる。

宮本常一「町のくらしの変遷」

(『府中市史』下巻 1974年)より

あなたは宮本常一（1907～1981）という人物を知っていますか？

2005年5月現在、インターネットの検索ページであるYahooで「宮本常一」を検索すると約13,000件、彼について記されたページがインターネット上にある、と出ました（ちなみに「美空ひばり」が約132,000件、「ジャイアント馬場」で約44,000件、「府中市郷土の森」は約4,000件、「府中市郷土の森博物館」なら約2,300件でした）。著作集としてすべてを出版すると100冊を超える（現在46冊で未来社より刊行中）、といわれているほど多くの著作のある人ですから、本だけの情報も入っているのですべてが彼を紹介したものとは思えませんが、それでもかなり全国規模で知られている人であることがわかります。しかしこの人物について、あまり府中市内の方には知られていないようです。今年の4月～6月にかけて「宮本常一の見た府中」というテーマ展を企画するにあたって、各所で彼の名を出しましたが「ミヤモトジョイチさん？ツネカズさん？」といった反応もあったくらいです。

日本の有名な民俗学者として、柳田國男、折口信夫、南方熊楠などがよくあげられますが、宮本常一は、こうした人びととならんで日本でもっとも有名な民俗学者の一人です。一般的に彼は民俗学者、つまり伝承、風習、祭礼などを研究する学者、とされていますが、それだけにとどまらず、農業振興や離島振興、地域おこしなどに力を注いだ人物としても知られています。

よくご存知の方にとっては、山口県の瀬戸内海に浮かぶ周防大島（屋代島）で生まれ、渋沢栄一の孫で大蔵大臣もつとめた渋沢敬三の庇護を受けアチック・ミュージアム（屋根裏の博物館・後の日本常民文化研究所）に所属、全国を旅した人、芝居やオペラなどにもなっている「土佐源氏」を収録することで有名な『忘れられた日本人』や日本各地の離島を巡り書き上げた『日本の離島』の作者、もしくは永六輔（作家・放送タレント）の師匠的存在、佐渡の太鼓集団鬼太鼓座（後に鼓童と分派）の結成の立役者、といった人物であるかもしれません。そして後年、武蔵野美術大学で多くの学生を育て、近畿日本ツーリストによってつくられた日本観光文化研究所で『あるくみるきく』という雑誌を編集していたことでも有名です。

そんな彼は昭和36年（1961）から、昭和56年（1981）に都立府中病院で亡くなるまでの約20年間、府中市新町に住んでいました。そして府中市文化財審議委員会の議長、府中市史談会の顧問、『府中市史』（下巻）

の執筆者など多彩な顔を持ち、同時に府中市内もよく歩いています。

また彼の業績の中で、高度経済成長期の日本各地を撮影した、約10万枚におよぶ写真を残したことがノンフィクション作家の佐野眞一氏らによって評価され、最近、『宮本常一 写真・日記集成』（毎日新聞社）が出版されたことにより、さらにその価値が高まっています。彼にとって故郷、周防大島と、晩年をすごした府中は、彼の旅の出発点、中継点、帰着点でありました。だからこそ非常に多くの写真があります。

調査してみると、彼の写真を所蔵する周防大島文化交流センターには、府中を撮影した、とされる写真が1000カット以上ありました。その中には彼の視点で見たさまざまな府中像が残されていました。

表紙の写真はそんな一コマです。「ケヤキ並木を横切る京王線」というタイトルで『府中市史』下巻に掲載された写真です。大国魂神社を背に、北向きで撮影しているようです。撮影地点に立てば分かりますが、現在レールは高架化され、このような風景は見られなくなっています。しかし、ちょっと前には当たり前だった風景の一つではないでしょうか。彼を知らなくとも、写真の多くは昭和30～50年代という、いまからちょっとむかしの府中を知るためのいい資料になっています。これからしばらく、宮本常一という人物とその写真を紹介しながら、彼の目を通して見た府中の姿、そしてその変化をたどっていきたいと思います。



宮本常一氏 昭和52年12月 宮本千晴氏撮影

上円下方墳って何だろう — & — 最新発掘速報

7月16日(土)～8月31日(火)

1,700年から1,300年も前、日本の各地で古墳が盛んにつくられました。古墳とは、土を盛り上げてつくったお墓のことです。

これまで府中市内では、直径10～25m程度の小さな円形の古墳が30基近く見つかっていました。ところが、最近になって、府中市西府町の熊野神社古墳が上円下方墳であることが明らかになりました。上円下方墳は、確実なものとしては全国で3例目という、とても珍しい形の古墳で、新聞やテレビで報道され、大きな注目を浴びています。

発掘調査の結果、この古墳がつくられたのは、飛鳥時代、今から1350年前頃のことと考えられました。その大きさは一辺32mで、府中最大であることはもちろん、1350年前ごろの古墳としては、周辺地域を見わたしても最大級であること、そして死者を埋葬する石室も大きく、精巧なものであることがわかりました。熊野神社古墳に葬られた人物は、これまで見つかっていた小さな古墳の主とは違い、権力を持った豪族だったのかもしれない。

展示では、「古墳とはどんなものか」をわかりやすく解説したうえで、熊野神社古墳の発掘成果を紹介していきます。

あわせて、市内の発掘調査のこの1年の成果も公開します。西府町1丁目の発掘調査で出土した縄文時代の土偶や古墳時代の刀など、なかなかの優れものが展示されます。

夏休みにご家族でご覧ください。

(深澤靖幸)



西府町1丁目で出土した土偶の頭部

西府町1丁目で見つかった
古墳出土の刀とその付属品



フシが熊野神社
古墳の主じゃ。



「自然観察会心理」

中村 武史

開館当初から継続する体験学習事業を個別に振り返る時、担当学芸員の様々な思いが渦巻き、成功と失敗の混ざり合う複雑な模様を描き出します。本連載は、それぞれの担当者によって綴られる種々体験学習事業の内面を紹介するものです。

博物館所蔵の自然資料は、大半が植物の腊葉（押し葉）や動物の剥製といった「標本」の形で存在します。動植物園や水族館が生き物を資料としている点とは大きく異なるわけで、悪く言えば、保存を目的に処理を施した生物の亡骸です。これらは生物の形態等を研究するために収集・加工されたものであり、ひと通り調査が終了した後で、必要に応じてそれぞれ展示に活用されるのです。なるほど、多様な生物を実物で確認する機会が得られることは大変貴重であります。但し、これだけで自然界を理解出来るわけがありません。周辺の環境と他の生物との関わりを知ることこそが必要不可欠なのです。近年はジオラマのような造作物で生息環境を表現し、その中に標本を置く生態展示の手法が多く見受けられますが、あくまで作り物は作り物、限界があるようです。自然の普及とは、ほとんどの場合図鑑を調べれば一目瞭然の生物名を教えることだけでなく、野外に飛び出して個々の自然観を養成することです。生物一点一点を線で繋げ、環境も含めて捉えなければ自然を観たことにはなりません。そんな思いで観察会を催してきましたが……

20年近くに亘る開催の歴史は試行錯誤の集積でもあります。市内で比較的自然の残る場所を選び、それぞれの場所と季節に見合ったプログラムを企画します。春は浅間山の野草、夏は雑木林の昆虫、冬は多摩川の渡り鳥といった具合です。遭遇する動植物の名称や解説以外で重要なのは、まさに「観る」ということです。府中崖線や国分寺崖線を歩きながら眼下に見える町並みを眺めて、府中が段丘地形であることを感じ、冬鳥を観察すればカモのデザインや行動の違いに気づき、春になってそれらの姿が消えてしまうことも認識します。雑木林に見られる蝶にはどんな種類がいるのか、クワガタやカナブンがどんな木に止まっているのかなど、実際に自然のフレームに飛び込んで見えてくるものこそが自然観に磨きをかける材料なのです。参加者は普段頭の中でイメージしているものよりも、良い意味で異なる生の自然に接した時の発見に驚くようです。そしてカラス一羽でもハシブトガラスなのかハシボソガラスなのか、種を識別することすら容易ではないことにも直面します。簡単に把握することができないのが自然界であることに気がつくだけでもこちら

としては大成功なのです。

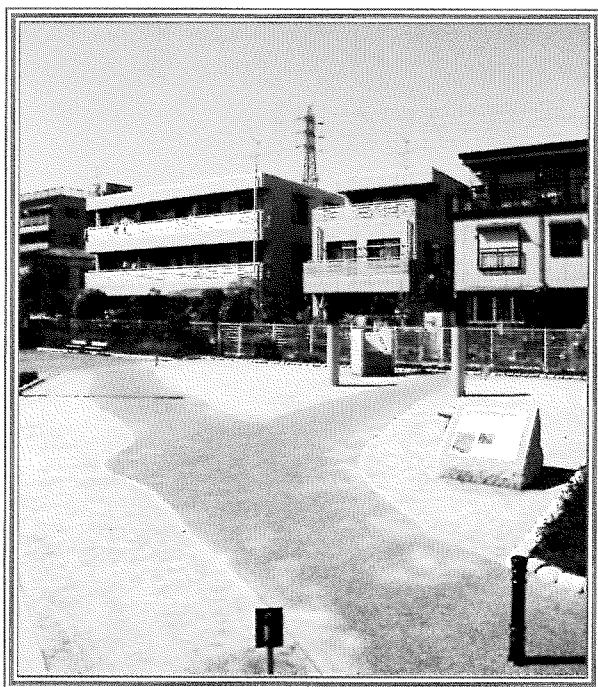
しかし、参加者全員にもれなくこちらの意図を伝えることは容易ではありません。開催側の目的達成が一筋縄でいかないことを実感させられます。それは観察会に参加する人の思惑も千差万別だからです。ある程度の知識を持って臨んでくる人は積極的に講師に質問をしたり、時には教える側の補助的役割もこなしてくれます。この場合、講師の領域をしっかりとわきまえた上で連携が取れば、当方としては予期せぬ有難い戦力となりますが……。大半の参加者は、知らない世界を覗きたいと考える人です。出掛ける機会の少なかった人の参加こそ大歓迎！自然の見方・考え方を白紙に書き込める分、吸収もし易いはずですが、往々にして生物の名前を聞いただけで満足してしまうケースがほとんど。この季節・この場所で、こんな生活体系の、といった説明が届かないこともしばしば。中には一人の散歩が寂しいから友達作り・話し相手探しを目論んで参加した旨、動機を語るご年配もいました。観察は二の次とは言え、河原のバードウォッチングでコサギを見つけ、双眼鏡を覗きながらの解説途中で「あーいたいた、あれね」と笑って指差す先がビニール袋だったこともあります。予想もつかないリアクションもご愛嬌、純粹に自然の仕組みや醍醐味をわかってもらおうとするこちらの意図をゴリ押しするのではなく、どんな楽しみ方であろうとも参加することから始まるのだと考えれば、二度三度と来てもらえるような雰囲気を作ることも重要な役目。まさに粘り強く回を重ねて、自然と親しむ機会提供者の心境です。継続は力なり！物は考えようで、歩きながら楽しむ、発見する、が積み重なった時、ふと何気ない会話の中からアイデアが生まれるように、突然の理解が訪れるのだと期待します。遊び感覚で臨んで効果が上がるなら、それこそが自然観察会の理想的展開なのですから。普段は見過ぎてしまう足元の自然を、できるだけ大勢の人に気づいてもらいたい……まずは外に出るきっかけが大事なのです。



春の野草観察会（浅間山）

府中市初の国指定史跡 「武蔵国分寺跡参道口」

栄町三丁目 府中市教育委員会 野田 憲一郎



武蔵国分寺跡参道口遺跡公園（まんさくの木公園内）

本誌 48 号で紹介しました武蔵国分寺跡参道口が、2005 年 3 月 2 日府中市では初めての国史跡に指定されましたので、改めてとりあげることにしました。

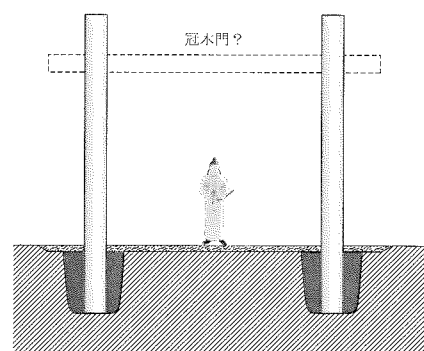
武蔵国分寺跡参道口は、市立第九小学校の北側にあたります。現地の発掘調査は 1999 年のこと。全国初の参道口跡として話題となり、新聞などでも報道されたため、記事を目にされた方も多いかと思います。

参道口跡とは、Y 字状に分岐した道路跡と、2 本の門柱状の遺構をあわせたものです。この Y 字状の道路跡は、北側へ向かう道路跡が国分僧寺へ、北西へ斜めに延びる道路跡は東山道武蔵路や国分尼寺へと向かっています。門柱状の遺構は、僧寺方向への道路跡に取り付いているため、僧寺への入り口を示す標識のような役割をしていたのでしょうか。右図のような冠木門と推測しています。

参道口跡から国府までの道のりはほとんどが未調査のため、あくまで推定でしかなかったのですが、近年、府中刑務所と東京農工大学と府中第一中学校の敷地内で、確認調査を実施したところ、ともに道路跡と思われる硬い土層が見つかり、国衙から国分寺が、やはり道路で結ばれていたことが明らかになってきました。国府と国分寺は全国各地に存在し、近接地に所在していることは明らかになっているものの、国府と国分寺を結ぶ専用の連絡路が見つかった例は全国的にも初めてです。

武蔵国分寺跡は 1922 年に国史跡に指定されて以来、指定の範囲を追加しながら現在に至っています。参道口跡の発見も、この一部になりますが、国府へとつながりを明らかにする発見でもあるので、この成果を武蔵国府の解明へとつなげていくことも重要なことです。今後は、国府と国分寺を含めた、武蔵国の中心地の景観を明らかにしていくとともに、よりいっそう保存整備を進め、多くの方々に親しんでいただける史跡を目指していきたいと思います。

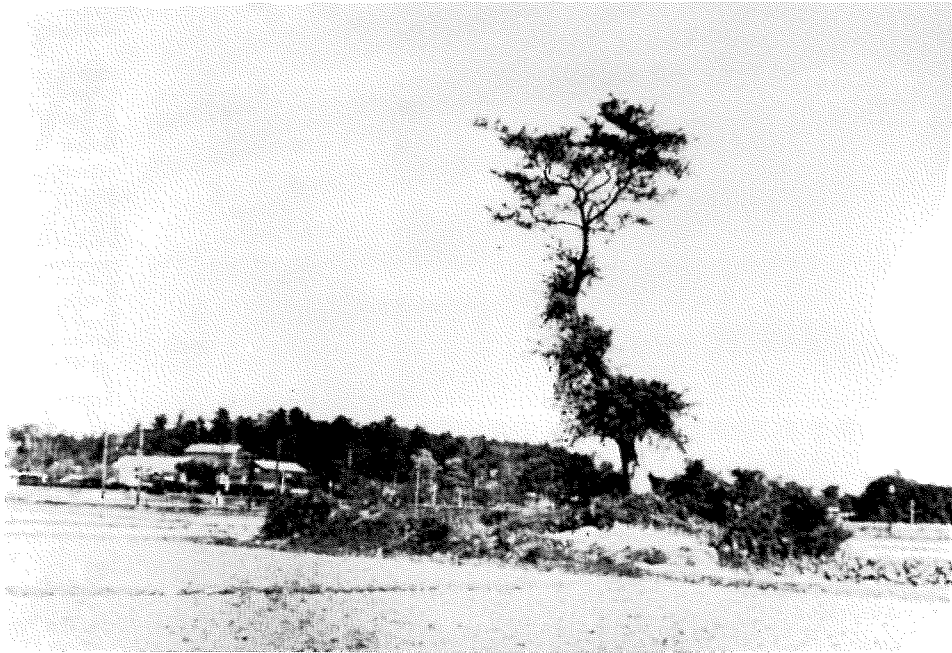
現在この場所は、遺跡公園として解説パネル等が設置してあります。当時の人がこの場所を入り口としたように、ここを基点として周辺の遺跡を巡ってみてはいかがでしょうか。



参道口門柱状遺構のイメージ図

移動する境界、野から川へ

—武蔵国と武蔵野—



三千人塚（1955 年前後、『写真集むかしの府中』より）

境の木・境の石

三千人塚（府中市矢崎町）には、大きな榎の木が立っています。民俗学者柳田国男は「山島民譚集（二）」のなかで、「榎は何故か知らず昔も今も道祖神の常の神木であつた。此木を境に栽ゑる風習は全国に行互つて居る」と述べ、榎の木が境界のシンボルであったことを示しました。ムラの内と外、聖と俗、この世とあの世を区切る「境の木」が榎だったといえます。

三千人塚から遺骨を納める骨蔵器などがかつて見つかったことや、康元元年（1156）銘の大型板碑が建つことなどから、あたりは当時の有力者の墓地だったとされています。当時は多摩川の河原が中洲のような所で、中世都市・府中の周縁部にあたっていました。いつの頃からか、塚上の榎は、府中の南の境界を示す標識の役割を果たしてきたのかも知れません。

もう一つの例として、享和元年（1801）成立の『武蔵三芳野名勝図会』は、川越にある浄土宗の名刹連誓寺の門前（川越市連雀町）にあった榎を紹介しています。「豎門前之南角に榎之古木有。昔より此榎を武蔵野の北の境の印の榎と云。享保年中倒れて今ハなし」。市街地の中心に近いところですが、ここが「武蔵野」の北の境界で、目印として榎があったという興味深い

伝承です。また、天保5年（1834）刊行の『江戸名所図会』巻2には「界木」（横浜市保土ヶ谷区境木本町）という地名についての記述があります。「界木 立場にして道より右に武蔵・相模の国界の傍示を建つるがゆゑにこの称あり」。東海道沿いで茶店もあった場所で、傍示木があったようですが、かつては国境を示す樹木が立っていたのかも知れません。

国境に石仏が祀られている例も、同じ『江戸名所図会』にあります。「界地藏 土俗、鼻欠け地藏と称ふ 光伝寺より九丁あまり西の方、鎌倉道の傍らにあり。（中略）このところは武蔵・相模の国界にして峠村と号く」。場所（横浜市金沢区六浦）は金沢八景で知られる六浦から鎌倉に向かう道の傍ら。少し行った朝比奈切通しが武蔵と相模の境です。このように境界の地を祀る風習は、かつては全国的に見られ、今も街の入口や村はずれに残る塞の神・道祖神や石の地藏などに面影を留めていると言えるでしょう。

境界の神話・伝説

境界の標となる木や石（石仏）については、神話や伝説の世界でも多く語られています。たとえば、奈良時代の『常陸国風土記』。行方郡の豪族箭括氏の麻多

智が谷を開墾していると夜刀神が出てきて妨害します。麻多智はこれを山の口まで追い込み打ち殺して、「標の税を堺の堀に置いて」、ここから上は神の土地、これより下は人間の田とすると宣言し、末永く祭祀を続けたというのです。杖を地面に刺したものが樹木になったという伝説も各地にあることから、標の税（杖）はやがてムウの人たちの生活圏を示す境界の樹木に変わっていったのかも知れません。

有名なイザナギとイザナミの神話も思い起こさせます。死んだイザナミを追って黄泉国に来たイザナギは思わぬ場面に遭遇し逃げ帰ります。追っ手を遮るために、『古事記』の話では「千引の石」を黄泉比良坂に置き、『日本書紀』では「杖を投て」岐神・祖神としたと書かれています。あの世との境に石または杖を設けたわけで、後世にクニやムウの境界に木や石を目印にして神や仏を祀る風習の起源がここに示されています。

境界としての「野」

先の『常陸国風土記』の説話からも予想できることですが、境界地点は開発行為の進展や生活圏の拡大によって移動していくものです。また、隣接するムウ同士の間関係によって境界が不安定な状態に置かれることがあります。そのような場合、開発との接点、緩衝地帯・中間地帯と言えるような地が「野」にあったのではないのでしょうか。『播磨国風土記』に、神がクニ作りの後に巡行して「山川谷尾」を境に定めたという話がありますが、制度的な境界に対して、自然発生的・流動的な境である「野」にも注目してみたいと思います。

『万葉集』東歌に5首登場する「武蔵野」はまさにこの例だと思います。「武蔵野のうけらが花の…」「武蔵野に占へ象焼き…」「武蔵野の小岫が雉立ち別れ…」など、ここに詠まれた「武蔵野」は、薬草のオケラの花が咲く野、神との交信とも言うべき占いをする所、旅立つ人を見送る場となっています。いずれもが境界としての性格を備えていると言えます。どこの境かと言えば、おそらく、東歌が作られた状況から考えて武蔵国府のマチを画する境界でしょう。そして、開発の進展とともに境界としての「武蔵野」は広がっていくのです。ちょうど、東京の西郊の「武蔵野の面影が残る」地が都市の膨張とともに遠ざかって行ったように。

移動する境界、境界の定着

こうして常に開発との接点に置かれた「武蔵野」は、その後背地の景観がより注目され、平安時代後期の歌枕としては未開の原野のイメージが与えられます。「武蔵野」の北の境界は、川越の榎が示した地にひとまず



境界の地蔵（『江戸名所図会』巻2より、本館所蔵）

は落ち着きましたが、そこは今日呼ぶ武蔵野台地の北端に一致しています。ところが、この時点で、境界としての「武蔵野」はそれ自体が周縁に境界を持つ存在に変化していることにも注意したいと思います。

文明18年（1486）に当地を旅した道興准后が「限りあれバけ分つくす武蔵野の境もしるき河越の里」（『廻国雑記』）と詠み、これを引用した『武蔵三芳野名勝図会』の編者が「河越の名の起こり八入間河を越る謂か」と記した時、「武蔵野」の境界として里や川が意識されていることは明白です。鎌倉時代に藤原為家（藤原為家）が「武蔵野ははや行き過ぎて隅田河 遠きわたり都恋ひつつ」と詠ったことや、道興准后と同じ年に隅田川に遊んだ僧堯恵が「西岸は武蔵野に続けり」（『北国紀行』）と述べたことも合わせて考えてみれば、「武蔵野」が北は入間川、東は隅田川、南はおそらくは多摩川によって区切られたエリアと認識されていたと見ることができそうです。

一方、武蔵国の南の国境は、少なくとも戦国時代の永禄12年（1569）までは多摩丘陵の杉山峠（町田市相原町）にあり、その後は境川（東京都・神奈川県境）に移ったと見られます。坂や峠、あるいは漠然とした「野」が境界とされ、標識の樹木や石が信仰されてきたにせよ、境が移動し点から線へと編制されていくなかで、より可視的で線状の河川が境界として認められるような場合があったことがわかります。

古の扉が博物館で開かれる!!

長い時間扉の奥に封印されていたモノが、再び博物館でよみがえろうとしています。

博物館には展示室のほかに収蔵庫と呼ばれる蔵があり、そこでは様々な資料が整理、収納され、展示の機会を待っています。それも蔵がパンクしそうなくらいにたくさんのモノが・・・。

博物館に限らず、物置や蔵、収納スペースに普段あまり使わないものや、かつて使っていたもので捨てるにしのびないものをとっておく人はたくさんいます。そんな人が先祖代々続いたとしたら一体どのようなことになるのでしょうか？整理整頓をよっぽどしっかりしない限り、どうしてそれはその中にあったのか？何のために使ったのか？といった品々が雑然と収納された、鬱蒼とホコリにまみれた空間ができあがります。しかし、だからこそその中を探検していけば、眠っている色々なお宝を発見する可能性が高いのです。何となく納められていただけのモノも、時には幾星霜を経て様々な価値を生み出しているのです。

たとえば弘化2年（1845）に建てられたという市内住吉町の旧家の蔵から、一本の木で作られた刀が発見されました（写真参照）。180cmはあろうかというその木刀には、「奉納石尊大権現」と記され、「延享三年（1746）」という年号、そして武州多摩郡大和田村（現在の八王子市）という地名が墨で記されています。「石尊」とは大山阿不利神社（神奈川県伊勢原市）の旧称です。これは府中市内から発見されたものであるのに、記された地名はこの地域のもでなく、しかも納められていた蔵よりもはるかに古い時代に作られていることがわかります。なぜそれが府中に？その答えは大山に参拝に行った時に、同じような刀を奉納するかわりに他の刀をいただいてくる、という、かつての大山信仰の名残、と考えられます。

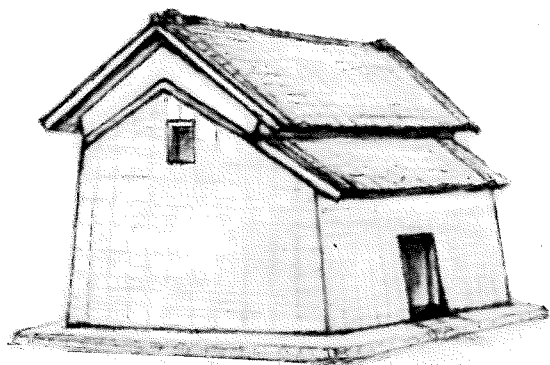
そのほか、蔵には一大家族が生活するに足るであろう多すぎる量のお膳、お椀、徳利などが大量に眠っていることもあります。なかには明治大正どころか、文政、天保といった江戸時代の年号が記され、とても古いものであることもしばしばです。とはいえ高級な品とはいいがたく、また骨董品としての価値も低いものかもしれません。しかしこれらは、人々がこれまでどのような生活を、何を保存し、また何が残ったかを知る貴重な資料なのです。

そうした観点から今回、近年博物館に寄贈された「蔵の中に眠っていたモノからみた府中」をテーマに、展示会を企画してみました。蔵にあった道具類を整理し、府中の昔を再構成して展示します。といってもホコリははらってありますので安心して見に来てください。

（佐藤智敬）



石尊奉納刀
横は博物館ボランティア・須田さん



住吉町の旧家にある穀蔵のスケッチ
画：大室智夫（博物館ボランティア）

テーマ展No. 34

蔵を開いて見ると

会期：7月3日（日）～9月25日（日）

場所：本館 2F 常設展示室

テーマ展コーナー

平成 16 年度 寄贈資料一覧

No.	寄贈者	資料名	分類	数量
1	有山ツル	祭半纏ほか	民俗	1 4 点
2	三遊亭金馬	紙芝居	民俗	9 点
3	昴彦一	日の丸小旗	民俗	3 点
4	矢内とし	屋敷稲荷	民俗	1 式
5	内藤正	蔵内の道具類	民俗	1 括
6	佐野邦雄	紙芝居	民俗	1 式
7	棒鶴木工所	木製遊具	民俗	1 0 点
8	菊池敏夫	蔵内の道具類	民俗	6 0 点
9	沢井与茂作	大鋸	民俗	2 点
10	消防団第 16 分団	消防ポンプ	民俗	1 点
11	住崎岩衛	お札・唐箕ほか	民俗	6 点
12	比留間ユキエ	大工道具	民俗	1 式
13	堀江文雄	鉤	民俗	1 点
14	朝倉治郎	川船模型・木挽き道具	民俗	2 点
15	矢島中	「ともしび読書会」蔵書	歴史	1 括
16	堀江文雄	錦絵	歴史	1 括
17	川崎英子	川崎昌登・昌美家文書追加分	歴史	1 括
18	土屋正	錦絵	歴史	1 括
19	大室政右	大室家文書	歴史	2 6 箱
20	村越喜代子	中山晋平筆府中 小唄楽譜	歴史	2 点
21	高野数明	多摩村全図	歴史	1 点
22	岡島義奉	大正大震災之記念	歴史	1 点
23	中村光夫	村野四郎こども 詩集ほか	村野 四郎	2 点
24	村野晃一	村野四郎詩集遠 いこえ近いこえ	村野 四郎	1 点
25	東郷隆	村野四郎詩集復 刻本他	村野 四郎	1 2 点
26	菊田守	村野四郎詩集	村野 四郎	1 点
27	大久保宣治	板碑	考古	1 点
28	清野利明	大国魂神社境内 採集古瓦	考古	2 点
29	長井静江	府中第一小学校 卒業証書ほか	教育	4 点
30	高野数明	尋常小学読本ほ か	教育	7 点

平成 16 年度寄託資料

No.	寄託者	資料名	分類	数量
1	芝間稲荷神社氏子 会	芝間稲荷神社勸 請証書	民俗	1 点
2	是政三丁目西部自 治会	鹿島神社棟札	歴史	3 点
3	田中淑雄	田中善太家文書	歴史	1 括
4	本多良雄	村野四郎書簡	村野 四郎	17 点

平成 16 年度利用状況

区 分		有料		減免 (障害者等)	合計
		一般	団体		
博物館観覧者 開館日数 309	大人	166,478	10,408	22,414	199,300
	子供	30,640	27,973	26,323	84,936
	小計	197,118	38,381	48,737	284,236
プラネタリウ ム観覧者 投影日数 292	大人	18,767	2,048	3,740	24,555
	子供	10,155	12,012	2,485	24,652
	小計	28,922	14,060	6,225	49,207
合 計		226,040	52,441	54,962	333,443

— 郷土の森博物館 新刊紹介 —

・府中市郷土の森博物館紀要第 18 号 (400 円)

《内容》 府中市内穀蔵の調査記録

(博物館ボランティア資料整理班 & 佐藤智敬)

中世武蔵府中における板碑造立の場

(深澤靖幸)

府中のお稲荷さん

(佐藤智敬)

『江戸名所図会』のなかのヤマトタケル伝説

(小野一之)

・ブックレット 5 『武蔵府中くらやみ祭』 (600 円)

・ブックレット 6 『古代武蔵国府』 (600 円)

・ブックレット 7 『馬場大門のケヤキ並木』 (800 円)

・大国魂神社文書目録 (2) (300 円)

・平成 15 年度府中市郷土の森博物館年報 (300 円)

★★★「あるむぜお」は定期購読できます！★★★

春夏秋冬、季節ごとに発行している「あるむぜお」の送付ご希望の方は、4 回分の送料 320 円 (切手でも可) を添えて、本館 1 階の受付カウンターでお申込みください。

たも RIVER WARS

⑨もう一匹の巨大ザル

中村武史

強烈な太陽は連日の猛暑を確約するべく再び地上に現れ、眩しく部屋を貫き通す陽光はカーテンさえ役を成さない。蒸し暑い空気が充満した空間の中で、ハニーは目を瞬かせながら天井を見つめていた。彼氏がほとんど眠れなかったのは、この息苦しい温度のせいではなかった。昨日までの摩訶不思議な体験のからくりが、おぼろげながら次々と解けていく快感で頭の中が冴え渡っていたせいである。ギラつく眼差しと微妙に緩んだ口元がハニーの表情をルナティックに演出し、第三者が見れば思わず真夏にかかわらずも寒気を感じたに違いない。朝食も早々に、ハニーは約束の集合場所に向かうため家を飛び出す…そう、多摩川と浅川の合流点から再度下流を自指してイカダに乘る覚悟と、謎の解明を決意して。

さすがに中学生は若い。2日間の疲労を引きずることもなく集合時間の8時には全員が揃った…いや…一人足りない。「あれっ？セイコはどうしたんだ」タウエがキョロキョロ探しながら誰と無しに聞いた。「あのね、今朝セイコのお母さんから連絡があってさ…どうも疲れて発熱したらしい。残念ながら本日の冒険はキャンセルだそうさ」やはりセイ

コは相当無理をして耐えていたのだと、エノキンの説明に耳を傾けながらタウエもハニーも納得の顔。間髪を入れずにエノキンが提案する。「その時に聞いたんだけど、郷土の森博物館に例のボスザルが出現したらしいぜ。特に悪事を働いたってわけじゃないみたいだけどどうも気になる。博物館はこの先の大丸堰エリアにあるし、どの道いったん川からイカダを上げないと堰を通過出来ないんだから、迂回しては行ってみようじゃないか」

夏休みの郷土の森は親子連れで賑わう。広い敷地の東側に造られた水遊びの池はさながら簡易リゾートの様相を呈し、黄色い声が天を突く勢いだった。「こんな場所にサルが現れたらちょっとしたパニックだよな」タウエが全員に聞こえるトーンで話す。「そうそう、ここに復原されている小学校の中に“多摩川ふれあい教室”ってあったじゃない？そこで情報収集しようよ」言い終わらないうちに3人は小走りに駆け出していた。……ふれあい教室は多摩川に関する情報を引き出すためのパソコンテータや映像・図書が揃っており、独自の観察会や解説を通して多摩川の知識を得ることが可能な拠点となっている。突然の訪問者にミスホというインストラクターはていね

いに説明を始めた。「本当に源流からあなたたちだけ下ってきたの？しがモイカダなんて信じられないな。えーと、サルだったわね。そう、私はここでは見たことがないけど、確かに出沒したとしても不思議じゃないわよ。去年だったっけ？人里にクマが下りてきて各地で事件を起こしたじゃない。山の環境が悪化して餌不足になると彼らは山を下りるしかないわけよ。たとえば今まで森や林だった場所が都市化されるじゃない？丘陵地の尾根を削った所に宅地ができる、そこ以外の斜面にだけ緑が残るよね。このわずかな緑は山を追われた動物たちの生息地にもなるし、奥山と都市部をつなぐ回廊のような役割を持つことになるのよ。その緑に沿って人家の庭や公園があったら……サルだってこういった場所にも現れるんじゃないのかな」興味深い話が終わると、エノキンはもう少し図書を閲覧すると言い出しその場に残った。

タウエとハニーはもう一度サルを探しに外へと飛び出していった。

先程とは反対の西側を散策する2人……植栽樹木の葉がうつそうと繁り、水遊び場と違って辺りに人影もなかった。「あつ、あれ！見て」突然タウエの発した叫び声にハニーもその方向を向くと、200m先の樹林の陰にまさしくあの巨大ザルが見え隠れしているのだ。「どうする？ハニー」タウエもこの先の行動に戸惑っていたが、ハニーの腹は決まっていた。「行こう！今

日こそ捕まえよう」瞬時にダッシュするハニーにつられてタウエも走った。巨大ザルも焦ったのか、反対方向にきびすを返す…とその時である。巨大ザルの目前にもう一匹の巨大ザルが出現したのだ。二匹の巨大ザルは互いに向き合っただけでしばらく硬直していた。あたかもケンカの際の視殺戦のごときである。寸分たりとも動かぬ時間の経過が1時間にも2時間にも感じられたが、我に返ったかのようにお互いはそれぞれ別々の方向に走り去ってしまった。傍観者の2人はただ唖然とするばかりで言葉も出ない。ようやく放心状態から覚めると、いつの間にかやって来たのか傍らにはエノキンの姿があった。「何だか随分な汗じゃない？顔色も悪いわよ」ハニーの問いかけに強張った表情のエノキンが答える。「ふれあい教室から走ってきたからさ。それより…また現れたんだな」その声がわずかに震えていることにハニーは注目した。朝までフル回転させた推理の矢が的をがすめたためである。少々腑に落ちない点もある…「何故ザルが二匹？それにエノキンは確実に動揺しているし…汗や顔色は走ったからじゃないわよ…絶対」棒立ち気味のエノキンは、明らかに昨日までの自信に満ちた彼とは別人であった。 つづく



多摩川ふれあい教室
復原建築物・旧府中第一小学校の教室内に設けられている